

神社祭祀主要建築の形式と相互関係

著者	坂田 泉
号	43
発行年	1961
URL	http://hdl.handle.net/10097/8779

氏 名	さか 田 いづみ 坂 田 泉
授 与 学 位	工 学 博 士
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 37 年 2 月 7 日
学位授与の根拠法規	学位規則第 5 条第 1 項
研究科，専攻の名称	東北大学大学院工学研究科 (博士課程) 建設工学専攻

学 位 論 文 題 目	神社祭祀主要建築の形式と相互関係
-------------	------------------

指 導 教 官	東北大学教授 飯 田 須 賀 斯
論 文 審 査 委 員	東北大学教授 飯 田 須 賀 斯
	東北大学教授 藤 田 金 一 郎
	東北大学教授 栗 山 寛
	東北大学教授 亀 井 勇
	東北大学教授 堀 一 郎

論文内容要旨

第一章 序 説

原始時代にはアジア大陸と日本との交渉は盛んとはいえないが、この閉鎖的な国土で培われた神社信仰は、大和朝廷の国家的統一により大陸文化（特に高度な仏教文化）が積極的に導入されて急速にその内容が充実した。そしてその神祇制度は平安時代に制定された「延喜式」（A. D. 927）によって確立されたのである。

原始時代から古代にあっては神社の祭祀行為は伊勢神宮にみられる如く神殿前の庭上で行なわれたが「延喜式」制定後は社殿も本殿に限らず徐々に整備変遷を重ね平安時代末期には神社建築の構成は略完成した。

また神仏習合は既に奈良時代にもみられ、平安時代に入ると次第に活発化するが、寺院内に神社を造営したり僧侶の創建になる神社があらわれて当時の寺院建築の形式を転用したものがみられるようになった。これを所謂宮寺と称する。

かくて古来の神社は仏寺の影響を受け、宮寺も神社の影響を受け、相互に関係を保ちながら変化するのである。しかし神社儀礼はその神社特有の神事を除いて略共通性を持ち、やがて発生する祭祀用建築の形式や整備にも共通的な性格がみられる。

即ち神社形態の略完成した平安時代には、既に創立されていた古来の神社の形式と配列、ならびに神仏習合の傾向の強い新たに創立された所謂宮寺系神社（仏寺の規模を模倣）の形式と配列の二種に大別される。

第二章 舞殿の形式と展開

神社の祭祀用建築として著しいものに舞殿がみられる。舞殿は「まいどの」とも称されるように元来の用途は神事舞の場であったが諸文献上では既に神事一般を行なうことが記してある。舞の行為は宗教的には重要な意味を持ち、その舞台も宗教建築として神聖視されている。

神社の舞は地上で舞うを原則として固有の舞台を持たなかった。これは神事が庭上で行なわれる事と相通ずるのであって、やがて祭祀用の建築があらわれ舞の場ともなった。

初期のものは恐らく幄舎でありやがて周囲の諸条件を充たすに足りる舞殿が発生したのであらう。

舞殿の形式には土間式と高床式とがある。前者は明らかに初期の形式であり後者は完成されたものである。

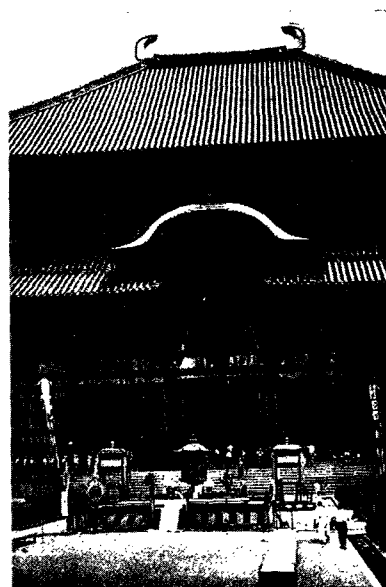
土間式舞殿の遺構として春日神社の舞殿が挙げられる。春日神社の神事は古今を通じて庭上の儀式であり平安時代前期には南舎とよばれる建築が神事に際して諸官の座に使用された。やがて雨天の不便さから既存の建築が雨儀用として使用されるようになるのであるが、その位置や大きさ等から南舎が用いられ南舎は舞殿とよばれるようになった。その時期は平安時代後期である。当建築は切妻屋根を架けた吹放しの簡素な構造でその前身が幄舎であったことが窺知出来る。

春日神社の舞殿は既存の建築を雨儀用として略式に使用した例であるが祭場中央に神事専用の施設があらわれ、その例として下賀茂神社の舞舎が挙げられる。（「小右記」寛仁元年）その形式は不明であるが今日石清水祭に使用される屯宮前の舞台がその当時の舞舎的な形式を示している。（第1図）

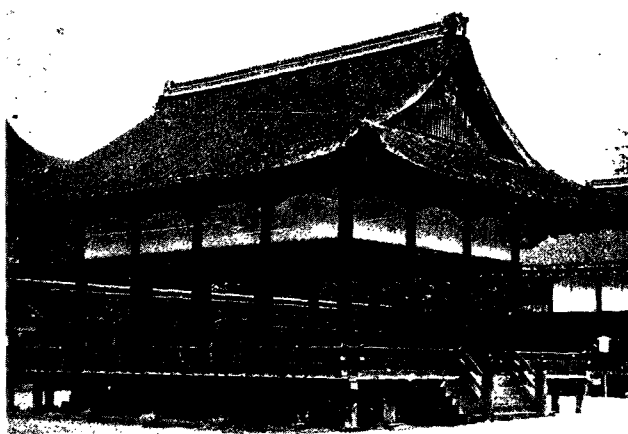
さてこの下賀茂神社の舞舎はやがて舞殿となり現在みられるような高床式舞殿として完成されるのである。即ち舞楽舞台に屋根を架けた恒久建築であって妻入であるがやがて入母屋造となり完成する。（第1図、第2図）



第1図 石清水祭屯宮前舞台



第2図 東大寺舞楽舞台



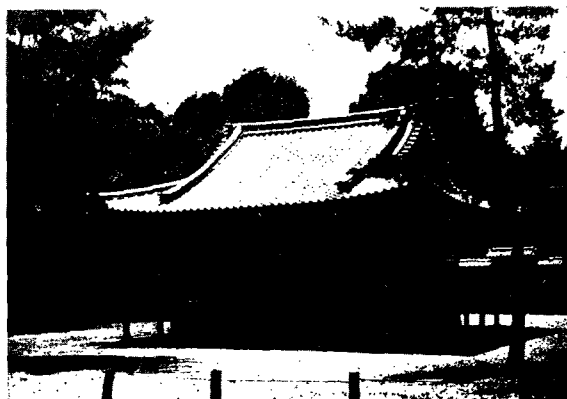
第3図 下賀茂神社舞殿

舞楽は仏教と共に日本に伝来した大陸系の舞踊で、固有の舞台を有していたが当時の日本の宗教舞は舞台をもっていなかった。

平安時代における神事舞は日本古来の民俗舞踊の倭舞や東遊を舞楽に改編したものであって、地上で舞うを原則とするので大陸系の舞楽とは本質的に異なる。

平安時代の神社ではかくして大陸文化の影響を受け、さらに舞殿の形式に舞楽舞台を採用していることは神仏習合の影響の大なること、ならびに神事と仏事の兼用に適するように造営せざるを得なくなった背景を如実に示している。これは神社的な発生によった舞殿のより仏寺的な歩みよりによって生じた結果を示す。

鎌倉時代以降になると舞殿の位置に、閉鎖的な礼殿形式（畳敷、障子）の舞殿系拝殿があらわれる。これは明らかに舞殿と礼殿の混合形体であって、神社的な形式の舞殿が仏教的な性格を多分に導入した結果発生した神仏事兼用の融通性ある祭礼用建築であることを知る。そしてこれ等は舞殿とは呼ばないで、すべて拝殿と称され、その建築構造は平入の礼殿形式であって、本来の妻入で開放的（吹放）な形式を失なった。（第4図）



第4図 下醍醐清滝宮

第三章 舞殿形式の舞楽舞台

平安時代後期に洛内著名社に広く普及した高床式の舞殿では主に我国風の倭舞や東遊が舞われたが大陸から伝来された舞楽はあまり行なわれなかった。しかしながら東海・北陸・東北地方には舞殿形式の舞楽舞台が存在し稚児によって舞楽が舞われている。

平安時代以前の舞楽は貴族生活と共にあったが政権が貴族から武士に移ると楽人達も貴族の保護から放れて地方に移住して舞楽を伝えた。平安時代につづく鎌倉時代は遊行僧の全国行脚によって神仏習合思想は全国に普及し神社と寺院の関係はますます深く、供養に行われた舞楽が神社で催されるようになった。

現存せる舞楽の諸例は必ずしも多くないが原形のまま存在するものはまことに少なくその多くが延年（鎌倉時代に寺院で流行した芸能）として伝承されている。その主要例を挙げ舞台の形式を表示することにする。この場合明瞭に延年であるものは省略した。

現在舞楽例（昭和34年）

社 寺 名	住 所	舞 台	勾欄	階段	橋掛	屋根	備 考
大日靈貴神社	秋田県八幡平町	木造置舞台	×	○	×	×	
小滝金峯神社	秋田県象潟町	石 舞 台	×	○	×	×	稚 児 舞
谷地八幡神社	山形県河北町	木造組立式	○	×	○	×	天王寺系という
平塩熊野神社	山形県寒河江市	木造組立式	○	×	○	×	
仙台白山神社	仙台市木下	石 舞 台	×	○	×	×	
高館熊野新宮社	宮城県名取郡	木造組立式	○	×	○	×	稚 児 舞
弥彦神社	新潟県西蒲原郡	舞 殿	○	×	○	○	稚 児 舞
天津神社	新潟県糸魚川市	石 舞 台	○	×	○	×	稚 児 舞
法 福 寺	富山県宇奈月町	木造組立式	×	×	○	○	稚 児 舞
加茂神社	富山県射水郡	木造組立式	○	×	○	○	稚 児 舞
小国神社	静岡県周智郡	舞 殿	○	×	○	○	稚 児 舞
熟田神宮	名古屋市	木造組立式	○	○	×	×	
住吉神社	大阪市住吉区	石 舞 台	○	○	×	×	天 王 寺 系
厳島神社	広島県佐伯郡	木造舞台	○	○	×	×	天 王 寺 系

現存諸例を考察していえることは

1. 木造組立式舞台が基本形式であることは古今を通じて変らない。舞台の構造は木造舞台・石舞台・土舞台等でこれら舞台で演ずる芸能は舞楽か延年である。
2. 北陸地方一帯及び静岡県下（小国神社を中心とする）の稚児による舞楽は舞殿風の舞台を使用する。この場合も舞台は組立式である。（第5図）
3. 舞台及び楽屋は階段にかわる橋掛によって連絡される。橋掛は舞台に登上する通路の役目をする。楽人の位置は楽屋であって舞台に坐る例は殆んどない。橋掛は舞台と楽屋の中央を結ぶ。（弥彦神社と小国神社の場合の橋掛の位置は片方に寄る）
4. 舞楽舞台の基本形式は階が前後にあるが、これら地方の舞楽舞台の階は楽屋側にのみ一ヶ所

ある。

5. 楽屋はその殆んどが高床建築であって楽屋のみならず他の用途にも使用されている。

6. 舞台及び楽屋の配置は、本殿（拝殿）・舞台・橋掛・楽屋と中心線上に並ぶ。この形式は舞楽の大人舞や稚児舞に関係ない。

7. 舞台の大きさは方2間で大人舞・児舞にかかわらない。しかし床高は無蓋の場合は3尺位であるが舞殿風の舞台では5尺位であって、前者は舞楽舞台の高さに一致し後者は後世の神楽殿の高さに一致する。



第5図 加茂神社（富山県）舞台

さて以上が現存舞楽舞台の一般的性格であるが舞台の起源は舞楽に求められ延年の舞台の固有形式は不明であって、室町時代に盛んとなった能舞台は妻入の屋根と橋掛のある固有形式を持つ。これら諸点を考慮に入れ、現存例の多い東北地方と北陸地方の舞楽舞台の特色を表示する。

地方における舞楽舞台の建築形式

	舞 台	屋 根	橋 掛	楽 屋	配 列	他の芸能との関係	そ の 他
東北地方	方2間、高さ3尺 舞楽舞台形式	なし	階段のある例もあるが一般には橋掛を持つ	長床或は建築物を使用するので舞台と床高の違う場合がある	主要殿屋の正面中心線上に並ぶ	一部児舞がみられるから延年の余波を受けているかも知れない	宗教建築
北陸地方	方2間、高さ5尺吹放、舞殿形式、舞楽舞台の床より高い	切妻造 妻入	あ り	舞台・橋掛の床高と同じ	同 上	稚児舞を主体とするから延年と関係があるかも知れない	宗教建築

即ち次のことがいえる。

1. 楽屋が高床になると舞台と楽屋を連絡するために橋掛が使用された。
2. 橋掛が使用されると舞台も高くなり舞楽はショー化する。
3. 舞殿形式の舞台が取入れられ普及するが鎌倉時代に流行した延年の主体は稚児であり、古くより神社では稚児を神聖視するので何時しか両者が結びついたのであろう。

第四章 幣殿の形式と変遷

幣殿の存在は既に奈良時代にみられるが当時は倉庫的性格を所有していた模様である。（「大神宮儀式解」28 年中行事并月記）また平安時代に入って下賀茂神社の幣殿も同様である。（「中右記」元永2・11・1）

しかし乍ら一般には本殿前の奉幣空間を幣殿とよぶ。その位置を考察するとき変遷過程に二通りあることを知る

1. 北野神社（10世紀後半）をその嚆矢とする所謂石の間が好例である。この石の間（幣殿）の特徴は本殿或いは拝殿とその桁行の大きさが同一である。即ち奈良時代に発生した双堂の前殿と後殿の中間の空間を側壁で閉鎖した形式である。この石の間を内蔵する形式を八棟造とよぶが、この形式の流行した時期は桃山時代から江戸時代にかけてである。

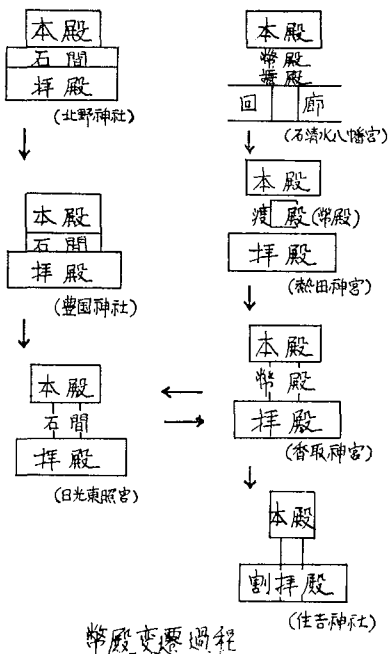
豊国神社（16世紀末）大崎八幡神社（17世紀初頭）日光東照宮（17世紀前半）

2. 平安時代後期に普及した神事用建築たる舞殿はまた幣殿ともよばれた。(平野神社) 即ち神事の奉幣及び舞行事に同一建築を使用したことによる。さて幣殿が神事の奉幣や祝詞奏上の専用建築となるのは鎌倉時代以降であって、その際舞行事は礼殿系拝殿にて行われるようになる。これは神仏習合が全国的に活発化する時期であり、八幡信仰の流行と同時期にあたる。

石清水八幡宮の幣殿と舞殿は同一屋根の下にありながら空間的に分割して奉幣と舞行事(礼拝も含む)は夫々幣殿と舞殿とよばれる異なった場で行われる。これはやがて機能別に建築が独立することを示すものである。即ち八幡造の神社では本殿前に幣殿(次第に床が高くなる)があり舞殿(舞の場)と楼門或は拝殿(礼拝の場)が結合して一つの拝殿となる変遷を辿った。この系統の幣殿の建築形式の平面は大率縦長である。床は土間(石敷)か低い板敷である。

立面は吹放し。周壁があっても低いか簡素である。即ち本殿と拝殿との間にあって独立している。形式は切妻造妻入の例が多い。

かくして幣殿は本殿と拝殿とをI字型に連結する平面構成となる。更に発展して屋根を架けると石間系のI字型社殿と合致する。以上の過程を図示することにする。



第五章 礼殿系拝殿の変遷と展開

神社建築の舞殿及び幣殿等の神事専用建築は一般参詣人にとっては神聖な親しみにくい存在であった。この祭祀用建築とは別に参拝や参籠等に使用される建築として所謂礼殿系の拝殿がある。今日では殆どどの神社にこの形式の拝殿が造営されているが、これは中世以降の神仏習合の全国普及によってあらわれた仏寺の色彩の濃厚な神社建築である。

その発生当時は宮寺のみにあられ、その形式及び機能はもとより神社建築の配列上の位置からみても仏寺の礼堂を神祕的に礼殿と改名したに過ぎず用途も神事よりも仏事に適していたことは当然な成行である。

さて平安時代末期には舞殿も礼殿も共に拝殿とよばれるが両者を比較するとき明瞭な相違点がみられる。

	本殿との関係	本殿以外の社殿との関係	建 築 形 式	用 途
礼 殿	本 殿 正 面	本殿或は回廊と接続	高床・横長平入・閉鎖的	仏事・参籠・諸官の座
舞 殿	同 上	他 の 社 殿 と 独 立 (本殿前庭中央)	土間(石敷)と高床・縦長か正方形、妻入、吹抜	神 事 専 用 (仏事を行う事もある)

また礼殿と礼堂の関係は

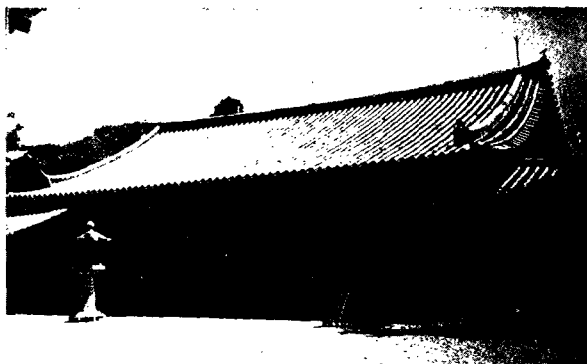
	本殿(本堂)との関係	門 と の 関 係	建 築 形 式	用 途
礼 殿	接 続 性 あり	門の転化したものもある	高床・横長・平入・閉鎖的	諸官の座・礼拝 仏事・参籠
礼 堂	同 上	同 上	同 上	諸官の座・礼拝 参籠

となり外見のみならず内面的性格も一致している。

いま礼堂を建築的に大別すれば二形式あって、正堂直前に併列するものと中門の位置にあるものとある。この形式はそのまま礼殿に移行し機能もまたそのまま礼殿に移行した。この正堂直前に附設された礼堂は奈良時代の東大寺法華堂を嚆矢とし、平安時代になって密教系寺院に広く普及した。(東寺灌頂院の初期形式、延暦寺根本中堂)

礼殿を造営した神社は何れも仏教と関係が深く祇園社は延暦寺とのつながりを持っている。

第2の系列に属する例は夢殿にみられる如く中庭を隔てた中門が礼堂化したもので熊野神社 (A. D. 1081) の礼殿や醍醐清滝宮 (A. D. 1089) の拝殿が挙げられる。(第6図)

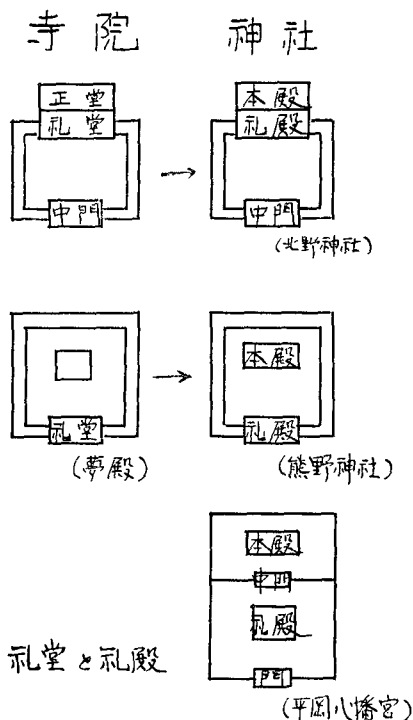


第6図 夢殿礼堂

以上は礼堂の転化した礼殿の例であるが第3の系列ともよばれるものに通常舞殿が造営される位置にあって同一の建築を場合によっては礼殿・礼堂・拝殿とよぶ一般の舞殿の概念とは異なる特殊な例がみられる。

平岡八幡宮は神護寺の鎮守社で神仏習合の強い神社であって平安時代の舞殿に代る礼殿と称される建築 (A. D. 931) が本殿・中門・釘貫・礼殿・斎殿・鳥居 (実録帳) の順に存在し、舞殿とは違った機能を持つ仏寺的な様式の祭祀用建築であったものと考えられる。(参考「神護寺伽藍図」室町時代)

高野山奥院や叡山浄土院の場合はその平面は横長であって、(扶桑略記、九院仏閣抄) 妻入の舞殿とは著しく形式が異なる。即ち礼殿或いは礼殿系拝殿の形式を示しその機能も仏事や参籠を



第7図 出雲健甕神社割拝殿

主目的としたものであろう。この形式の礼殿の神社社殿配列上の位置は明らかに古来の神社の配置形式を模しているのここに宮寺が神社の影響を受けた一端を知るのである。

中世以降になって高良神社（高良縁起・八幡印幸記）や出雲大社（慶長十四年御造営之図）等の拝殿の形式は礼殿的形式を帯びるがこの場合の機能は舞殿と同様に神事を主目的とする。

さて礼殿及び礼殿系拝殿は平入高床形式で閉鎖的な空間を持ち仏事を行なうを主目的とするのであるが、神事に際して行事官座にあてられた。この礼殿系拝殿から派生したのが割拝殿であって社殿配列上の位置及び機能は兩者酷似し、中世以降の芸能の流行にともなって割拝殿は神事芸能の舞台ともなった。（第7図）

第六章 舞殿と拝殿の并存

古くは神事は庭上で行われ現在もその例をみる。やがて祭祀用建築として舞殿が発生した。また寺院では舞殿に相当する恒久建築はあらわれなかったが、大陸から導入された舞楽舞台がその位置及び機能の点で舞殿に相当する。

神仏習合的な所謂宮寺とよばれる神社にみられる礼殿は仏事の礼堂の転化したもので、これはその形式や機能の点で仏事を行なうために計画的に造営された意図がうかがえる。

従って宮寺の神社では礼殿（拝殿）は必要不可欠な存在であって舞殿は舞台で代用されるが礼殿の存在しない神社ではそれに代る仏事用の建築が必要となり舞殿が兼用された。

このことは兩者の并存の意味のないことを示している。しかし乍ら舞殿と礼殿はその発生時から機能を含むすべての点で別途を歩んでいるので兩者の并存は機能別に使用するにより便利である。そして社殿の増加は神社の尊厳さをより増すことになるであろう。

また兩者が并存する平安時代の神社は宮寺的な神社であって先ず礼殿が造営され舞殿は遅れて造られる傾向にあり（祇園社・醍醐清滝宮）宮寺では舞殿の存在は左程重要視されなかったことを物語る。（厳島神社では舞殿は祓殿となり行事は主に拝殿で行なわれる。）

第七章 結 語

過去の神社建築史の殆んどが本殿のみを対象とするが神社はそれを構成する各社殿の関係を追求することにより、はじめてその性格を把握し得るものである。

特に神社建築は日本的なものとしてしばしば論ぜられている。その中にある日本的なものとの質的なものとの建築上の融合分離を形式と機能の分析によって考察した。

ここに挙げた神社祭祀用建築は神社にあらわれた初期のもので平安時代に重点を置き次の如き結果を得た。

これはその通性を示すもので特殊例はこの限りではない。

1. 礼堂（寺院）と礼殿（神社）の関係は形式及び機能の点で略一致する。
2. 舞殿と幣殿の関係は形式及び機能の点で略一致し、古くはしばしば同一建築として取扱われた。
3. 礼殿と舞殿は形式及び機能の点で殆んど一致しない。
4. 平安時代末期に発生した割拝殿は礼殿系拝殿の変形であってやがて舞殿の形式及び機能の混合体として展開する。
5. 舞殿において土間形式の場合は古儀たる庭上の儀の延長であり、高床形式の場合は舞楽舞台と関係の深いことを知る。
6. 舞殿系拝殿が建具類（障子）によって閉鎖性を持ち礼殿系拝殿の性格を所持したとき建築的な形式や機能の点で兩者の融合体とみなすことが出来る。即ち舞殿の中世的展開を示す。

以上は各建築間の関係であるが神社全体として配列上より考察すると

祭祀用建築の形式と用途

建築名		建 築 形 式							用 途					
		平 入	妻 入	吹 抜	壁	回 縁	勾 欄	短 形	方 形	神 事	仏 事	居 座	参 籠	芸 能
礼 堂		○			○	○	○	○		○	○	○	○	
礼 殿		○			○	○	○	○		○	○	○	○	
礼殿系	拝 殿	○			○	○	○	○			○	○	○	
	割 拝 殿	○		△	△	○	○	○		○	○	○	○	○
舞 楽 舞 台						○	○	△	○	○	○			○
庭 儀										○				○
舞 殿	舎		○	○				○		○				○
	土 間		○	○				○	○	○	○		○	○
	高 床		○	○		○	○	○	○	○	○		○	○
平入舞殿		○		○	△	○	○	○	○	○	○		○	○
幣 殿	土 間		○	△	△			○	△	○				
	高 床		○	△	△			○	△	○				

その1. 古来の日本にみられる神社の場合

本殿・中門（鳥居）・祭場・門（鳥居）

例 賀茂神社，春日神社等

即ち庭上の儀が古儀であるから神事用建築として発生した舞殿は必然的に祭場中央に造営される。その位置は中門前庭である。（賀茂神社等）行事官の座は中門がまた祭場の一部であるから祭場前方の左右があてられる。（上賀茂神社の細殿・土屋）

その2. 仏寺の伽藍配置を模す。（所謂宮寺）本殿・祭場・中門（回廊を附設する）

例 石清水八幡宮，北野神社等

寺院の法会の本堂前庭に仮設された舞楽舞台を使用するのでその周囲が行事官の座となる。

この形式はそのまま宮寺的神社で採用された。北野神社の如く仮設舞台を設ける場合（平安時代）もあるが石清水八幡宮や祇園社の如く舞殿を建てる場合もある。行事諸官の座として礼堂の轉身たる礼殿が使用される場合，神社では仏寺の如く中庭が広くないので回廊がそれにあてられることが多い。（仏寺でもその例がある。）

この場合回廊が高床となるのは神社の一特性であるが，これは明らかに居座的空間を示す。

神祇制度が整備された平安時代後期の神社の性格は以上の二系列の何れかに属するのであってその1の形式は習合思想の影響を受けて回廊や楼門等が導入されるが，中世以降にはこの本来の配列が崩れ両者が相互に混合して複雑に展開する。しかしその配列は両者の何れかの形式をより強く反映している。

終りに終始変らぬ温情で御指導を賜った飯田教授をはじめ建築学科の諸先生ならびに全国の神社の関係の方々，多くの図書館に深く御礼申し上げます。

審査結果要旨

日本建築史上、神社建築は形式の変遷上重要な位置をしめている。従来神社建築における本殿建築形式の研究は進んでいるが、これにともなう幣殿・舞殿・礼殿・拝殿など祭祀（祭典）に関する建築についてはいまだ未研究な部分が多かった。本論文は著者が祭祀用建築の主要なるものを実地調査し、さらに古図・絵巻物などを含めた文献に基づいて考証し、系統的に研究したもので全文7章よりなる。

第1章は序論で、ヒモロギ・イワサカ以来の祭祀形式をのべ、奈良時代をへて平安時代の前期（AD. 871）にできた貞観儀式や、平安時代後期初（AD. 927）の延喜式などで神祇制度が整備し、祭祀形式も一定したことを挙げている。これによると祭祀を神殿前の庭上で行なうのが原則であるが、雨の時には雨儀を行なうことに注目している。また、平安時代後期に入り（AD. 900）神仏混濁が活発となるのであるが、その影響により仏寺的神社（いわゆる宮寺）が生れたことを指摘している。

第2章は舞殿についてのべたものである。初め祭祀は庭上で行なったが、平安後期（AD1000）頃以後その位置に舞舎が建ち舞殿に変わり拝殿となった。その間に構造的に見ても土間が高床になり屋根も切実が入母屋に変わったことを明らかにし、その発生および変化の動機として雨儀と仏事とを挙げている。これは従来考えられなかった全く新らしい重要な知見である。

第3章には舞殿風の舞楽舞台についてのべている。これは仏教的な舞楽舞台が神社に移入されたもので、（厳島神社など）やがて他の地方にも広まり、室町時代（AD1100頃）に到り屋根のついた舞台が東海・北陸・東北地方にあることに着目し、実地調査の結果本論の正しいことを立証している。これまた新らしい重要な知見である。

第4章では幣殿の形式とその変遷とをのべている。幣殿と舞殿とは同じ屋根の下に建てられてきたが高床形式となって舞殿系拝殿となった。他方宮寺では幣を奉る部分が分離していることを見いだした。すなわち、北野神社などでは舞の場は礼殿系拝殿の前庭に見られ奉幣の場は本殿と礼殿系拝殿との間に、石の間（または幣殿）として用いられた。（大崎八幡・日光東照宮は同系）

第5章では礼殿系拝殿についてのべたものである。宮寺の拝殿は仏寺の礼堂の形式を借りて造ったもので、建築構造も用途もほとんど同一で、はじめは礼殿と称したが、後に拝殿と改名した。その年代は丁度舞殿を拝殿と改名した平安時代後期末（AD 1100）頃であることを指摘している。この拝殿は、はじめは仏事のみで神事の場合でなかったことから、神仏混淆による建築用途の変遷を論じている。

第6章には礼殿系殿と舞殿とが併存する例をのべている。祇園社の如きは仏事用には礼殿を、神事用には舞殿を使用することは両殿発生の系統を異にすることを示す好例であるとしている。また、平安時代末期にできた厳島神社では礼殿系拝殿のほかに舞殿があるが、鎌倉時代に入り（AD. 1250頃）神事も拝殿で行なうようになってからは、舞殿を祓殿と改名したことを指摘している。

第7章は結論である。これに加えてかつ鎌倉時代以後（AD. 1300—）宮寺系神社の形式が発展したことをのべている。

以上要するに本研究は神社の祭祀用建築の建築形式とその変遷とに着目したもので、文献と実地調査の幾多困難を克服して雨儀および神仏混淆による発生発達の理由とその時期とを解明し、かつ立証を行なったもので、この種建築史上その全貌を始めて明らかにしたものである。建築史学に対して大きな貢献をしたといえる。

よって、本論文は工学博士の学位論文として合格と認める。